釣れ釣れなるままに

２００７年思い出の釣行記 PART.　４

大志を抱け

襟裳夕陽ヶ丘平盤

鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第４回大会

☆開 催 日	平成１９年７月１日
☆開催場所	冬島港～エリモ港
☆入釣場所	夕日ヶ丘平盤
☆潮	干潮　２１：１１　１１２㎝
	満潮　０２：２４　１５１㎝
	干潮　１０：０２　１２㎝
☆天　候	霧雨　波１ｍ　風弱い
☆エ　サ	カツオ５本　イカゴロ７０本　イソメ２箱　エビ１パック
	アカハラ（前回大会調達）
	撒き餌　ソイアブラコカジカ２袋　イサダブロック１個
	オキアミブロック１
☆釣　果	ハゴトコ　３０４　㎜
	アカハラ　２７０　㎜
	重量　１３２　０ｇ
☆成　績	合計点数　７０６　点
	成績　３　位
	持ち点　４　点
	累計点　１１　点（⑤①①④）

開拓者精神

一度も入ったことのない釣り場を開拓するという目標もあり、琴似、幌満、エリモ港周辺を頭に描きながら資料に当たっていた。折しも、「北海道のつり」６月号で、笹崎充男氏の日勝大和周辺での爆釣記が紹介されたので、それを参考にしながら、潮の高い暗い内は各舟揚場で、潮が落ちてからは、エリモ港の脇についた夕日ヶ丘平盤にと的を絞った。

釣行予定

日勝大和舟揚場：クロガシラ（３０）　ＯＲ　エリモ港：カンカイ（３０）
↓　　アカハラ（３０）　　↓　　アカハラ（３０）
夕日ヶ丘岬左湾洞付け根：カジカ（３５）エリモ港西防波堤角：カジカ（３５）
↓　　↓
夕日ヶ丘平盤右：アブラコ（４０）

カナダ屋釣具店に立ち寄ると、安曽和夫氏（愛釣会）に会い、今年初めての大会参加になるが、様々な情報から笛舞港周辺（アベヤキ川）に入る予定だと知らされる。開拓者精神がグラッと揺れる。佐々木秀美氏にも会ったが、彼は旭漁港でカンカイの嫁を取ってから近浦方面に移動する予定を組んでいるらしい。カジカの嫁を取るのは難しいようだ。カジカ場として慣れ親しんだ近浦にするかと開拓者精神がグラグラッと揺れる。第１回の中歌は初めての釣り場だったがそこそこの成績が出て、第２回弁慶岬、第３回尻別岬と新規開拓で２連勝したので、今回の大会でも無様な闘いはしたくないと自分の心に言い聞かせて集合場所に向かった。

出発前、佐々木氏が私の気持ちを代弁するかのように、今回の最干潮時（１０：０２）が締め切り時刻と重ねっており、潮の引いた岩盤に乗っていられる時間が少ないので、締め切り時刻を１時間延長して実施出来ないかと役員に申し出たが、その予定はないとニベもなく断られた。

鰾膠（にべ）：①海魚ニベの鰾（浮き袋）から製する膠（ニカワ）。また、鯉・鰻・鮫などのウキブクロからも製する。粘着力が強く、食用・薬用・工業用など。②（粘着力の強いところから、転じて他人に親密感を与えること。多く、否定形で用いる）愛想。愛嬌。世辞。
ニベもない：愛嬌もない。思いやりもない。
ニベもしゃしゃりもない：（粘り気もなければ、しゃりしゃりしたところもない意から）味も素っ気もない。ひどく無愛想である。
ニベ：①スズキ科の海魚。体長９０㎝で背ビレに切れ込みがあり、イシモチに似る。背は灰青色、腹部は淡色。鳴く魚として有名。その鰾（浮き袋）から膠（ニカワ）を製する。南日本・中国の近海に産する。②スズキ目ニベ類の海魚の総称。ニベの他、オオニベ、イシモチ、キングチなど。

バスは快調にエリモ港に向けてひた走り、途中、東山中でたくさんの仲間を下ろした。

新山中トンネルの開通後はトンネル間にある東山中でバスを停車させることはなかったのだが、交通量の少ない往路だけは停車するという特別措置を講じたのだ。復路は交通量が多くなり危険なため、トンネルの出口である山中か幌満までの長距離を歩いてからバス待ちをすることになるのだが、ほとんど竿が入っていない東山中での爆釣を夢見た会員が殺到したのだ。またもや開拓者精神がグラグラグラッとする。

青年よ大志を抱け

「青年よ大志を抱け」と壮年とも言えない老齢で、エリモ港に入る相馬氏一人を残して夕日ヶ丘バス停で下車した。地図で確認していたように、アスファルトの道に沿って下っていく。相当早く着いたように思っていたのだが、各舟揚場（ＢＣＤ）には所狭しと釣り人が入っていた。夕日ヶ丘平盤（Ｅ）への入口にあたる砂州の左右の湾洞にも、ギョギョライトが光っている。そんなこともあろうと予想はしていたので、最後の逃げ場所としていたエリモ港造船所裏角に向かう。バスの中の情報では釣り竿の先がわずかに出る程度の高い胸壁で釣り場ではないといわれたが、これもやはり「北海道のつり」７月号の巻頭にある釣り場紹介写真に、その胸壁の上にいる釣り人が写っていたのだ。(右写真)

途中、水産加工場からの排水が海に注ぎ込んでいる箇所がありカジカがいるのではないかと興味をそそられ後ろ髪が引かれたが、防波堤より一段高くなった波よけ胸壁の上を歩いていく。狙いとしていた角は足下のスペースが極端に少なく危険である。一段下がった胸壁の上は弱冠幅が広くなっており、何とかやれるだろうと判断して三脚を設置した。

０：００、２本バリ仕掛けをエリモ港と夕日ヶ丘平盤の間になる湾洞の出口に向かって遠投する。ネット仕掛けをその手前に中投する。さらに、イカゴロ天秤ネット仕掛けをその手前へと近投する。そして、足下のスペースがないので最善

の注意を払う。海側にはもちろんだが、背後の造船所側にも墜落することが出来ない高さだ。アタリがあった時には竿先だけを見て足下が疎かになるような慌てた行動をしがちだが「落ち着けよ」と肝に銘じてから対応する。特に魚がかかって強引にリールを巻く時や根掛かりした糸を引っ張る時には微妙な体のバランスを保つようにしなければならない。平磯では、魚が外れたり、道糸が切れたりした時に勢い余って後へ尻餅をついたことが何度もあったからだ。

打ち込みを終えた直後、釣り人２名が先の角に入った。私の打っている方向を確認して、チョイ投げと垂らし釣りなので私の釣りには支障がない。何とかチビハゴトコを２匹上げたところで、更にその先のテトラの上にも人が入って私の投げ入れている方向に遠投し始めた。これにオマツリしてしまった。仕掛けを引き寄せる時、すぐ隣の人のチョイ投げにも絡んでその竿を海中へと落としてしまう。竿の持ち主が休憩中で不在だったため、絡んだ道糸を引っ張って竿を引き上げようとしていると、その先にいた仲間が気付いて拾い上げて事なきを得たがあずましくない。「私が先に入って釣りをしているのだからやめてくれ」と言える度胸もない。方向を変えて打ってみるがさっぱりである。

老年にも一縷の志を

３：３０、隣の釣り人が片付け始めたのを機に私も移動を決意する。嫁になるアカハラをとるためにエリモ港内へと向かった。途中、運転手が仮眠しているはずの釣りバスが見当たらない。帰りはどこへ戻ろうか。バスを降りた夕日ヶ丘バス停へと戻らなければならないのだろうか。

エリモ公園の真ん前にある川の出口（佐々木秀美氏に教えていただいた）でアカハラ仕掛けを近投する。１本は２５号竿に取り替え、カレイでもカンカイでもとイソメを付けて遠投する。港内は潮が透き通っていて海底の海藻や小石、ゴミまでもが手に取るようにはっきりと見えるので余り期待は持てない。１０ｍほど前方には藻が浮かんでいる。アカハラ狙いなので天秤ゴロ仕掛けなのだが、昆布が引っ掛かってくる。海底は砂地ではなく昆布根なのだ。アカハラはおらず、チョコマカとアタリが出て３０㎝のハゴトコが釣れた。ハゴトコでは嫁にならない。

向かいの船着き場に釣り人が２名見える。どうもカンカイ狙いではなくアカハラをねらっているようだ。魚を取り込んでいる様子も覗える。再度移動して、仲間に入れてもらい、チビウグイを２匹（１匹目は２９㎝、２匹目は更に小さくなって２５㎝）をやっとの思いで上げる。そして、すぐに夕日ヶ丘へと向かった。

志は消え入りそうだが

６：００、向かう途中に釣りバスを発見したので帰りについては心配ない。私が先に上がっていた胸壁にもう一度上がり、夕日ヶ丘平盤を一望した。付け根の湾洞で釣りをしていた人たちは、潮の引いた平盤に向かってかなり前進している。私がここから移動してい

るうちに岩盤の先まで出て行けるようなるだろう。

湾洞の根元では、相馬氏がまだ粘っており、タカノハを釣ったということだ。「３５㎝に満たないがリリースしなければならないだろうか」と応えに躊躇するような難問をぶつけられたが、「私が証人になってもかまわないが、獲物がなくても審査してくれるかどうか自信が持てない。釣り人としてのマナーを犯すことになるが、カレイは審査対象になるので念のために確保しておいた方がよい。」と日常考えていることとは反対のことを応えてしまう。同じ所に和八日出光（和光会）と名の入ったリュックが置いてあった。

潮待ちしていた３名（山田幸介ＨＦＣ、国仙、和八日出光、？大漁会）が前方の小高い岩に出て行ったので、私も後に続いて荷を下ろす。先行の１名（国仙）が更に先の出岬に上がったので、その右横の波かぶりの平盤に乗る。すぐに国仙氏の隣に和八氏が入り、追っかけてもう１名が入る。私の右にも山田氏が出て来た。左の湾洞に面した盤には２名が乗った。

浅いが昆布根も豊かに波打ち、アブラコがいつ出てもおかしくない磯模様である。しかし、たまに竿を揺らすのはハゴトコばかりで、周辺の釣り人にも大物が掛かった様子はうかがえない。隣の大漁氏が４０㎝ほどのカジカをあげた。佐々木氏がバスの中で「この場所は、岡氏が得意とする場所で、横溝にカジカがいる。」と言っていたのが思い出され、消え入りそうな志にポワッと灯が点る。

ふいにバッコン、バッコンと大きなアタリでた。カジカだ！　しかし、痛恨の根掛かり。しばらく放置してカジカが岩から出てくるのを待つ。しばらく間があった後に再度大きなアタリが出た。強引に竿を煽ると大カジカがついていたであろうハリス１本が切れていて、もう１本にはチビハゴトコがついていた。

７：３０、何度も打ち返すが、ハゴトコのアタリのみでそれも途絶えてきた。最後の足掻きと３人の更に左の盤に乗ろうと試みるが、溝が深く出て行けない。国仙氏が携帯で取り交わした情報によると、この周辺ではほとんど魚があがっていないということだ。山中や笛舞、近浦も同じ状況だという。山田氏はエリモ港から先の範囲を大和まで戻ってやったが釣れないのでここに来たと言うことだ。灯が完全に消えてしまった。

９：００、用意したエサを随分余して片付け、バスに向かった。エリモ港から出発した釣りバスに首を項垂れながら仲間が乗ってくる。悲惨な結果であった。唯一佐々木氏がカジカ４４．５㎝で優勝。嵐氏の３８㎝ほどのアカハラが身長優勝。アブラコはなしで今回の大会は終わった。

合唱団の遠征から帰ってきた妻が冷蔵庫に魚が入っていないことに気づいて恐る恐る大会の結果を聞いてくる。「獲物の始末をしなくて、大変楽だった」と強がりを言って誤魔化したが、次回は負け惜しみともとれるこの言葉を吐かなくてもいいような釣りをしたいものである。老年よ再び大志を抱け！

審査結果

優　　勝	佐々木秀美	１０３１点	(ｶｼﾞｶ　445㎜+ﾊｺﾞﾄｺ290㎜+2960g)	東 山 中
準 優 勝	嵐　光博	７４８点	(ｱｶﾊﾗ343㎜+ﾊｺﾞﾄｺ265㎜+1400g)	下 近 浦
３　　位	谷口良幸	７２４点	(ｶｼﾞｶ　283㎜+ﾊｺﾞﾄｺ281㎜+1600g)	山　　中
４　　位	鹿島釣狂	７０６点	(ﾊｺﾞﾄｺ304㎜+ｱｶﾊﾗ270㎜+1320g)	夕日ヶ丘
５　　位	堀内正博	６７８点	(ｱｶﾊﾗ314㎜+ﾊｺﾞﾄｺ250㎜+1140g)	上 近 浦
身長優勝	佐々木秀美	４４，５㎝	(カジカ)	東 山 中

【つれづれ】

○佐々木秀美は北のつり会の大会と重なっているが、今回は釣遊会に参加することを決め、その言い訳を消防団の活動のためとしたらしい。途中のコンビニでのトイレタイムをとったが、同じ場所で北のつり会のメンバーが札幌からのバスを待っているということで、慎重な行動を余儀なくされていた。また、帰りの昼食やトイレタイムでも極力バスからでないようにしていたのが可笑しかった。今回の大会は佐々木氏が優勝したが、名前が出ては困るだろうという配慮から、事務局で大会成績表を新聞社に送ることを見送った。

○エリモ港内ではカラフトマスの跳ねが見えた。

○妻は合唱団の遠征と称して日曜から月曜にかけて「名水亭」に一泊した。